

近代における鳥居強右衛門顕彰

岡村 龍男

はじめに

本稿は、長篠合戦の前哨戦である長篠城攻防戦の折、城主奥平信昌の命を受け、城を出て家康に援軍を求めに行き、その帰路武田軍に捕まり磔刑となった鳥居強右衛門について、東三河の人々が明治以降にどのような顕彰活動を行っていたのかを明らかにするものである。

長篠合戦は、東三河を舞台とした合戦のなかでも、日本史上著名な合戦であるが、合戦そのものに関する研究だけでなく、近世前期から中期における、長篠合戦に参加した武士の子孫たちによる歴史書の編纂に伴う合戦伝承の形成^①や、近代における地元住民が主体となった供養碑・顕彰碑の建立を伴う古戦場空間（史蹟）の形成に関する研究^②も行われている。そのなかで、本稿で取り上げる鳥居強右衛門についても、後年における慰霊や顕彰活動が注目されるようになってきている。

金子拓氏は近世以降に強右衛門の「虚像」が、いかなる経緯をたどって増幅、再生産されていったかを検討された^③。近世については史書や大名家の系譜などでの強右衛門の取り上げられかを検討された。また、近代については錦絵、教科書、小説などで一般にひろまった強右衛門の虚像が、日清、日露戦争を経て軍国主義に利用されながら広まっていく様子や、強右衛門の生地である宝飯郡八幡村市田（豊川市市田）と合戦の舞台となった南設楽郡長篠村、東郷村（ともに新城市）における顕彰活動を明らかにされた。

また、羽賀祥二氏は、長篠合戦戦没者の慰霊を通じた史蹟空間としての長篠古戦場の形成過程を分析された^④。近世の地誌における長篠合戦の記述、明治以降における鳥居強右衛門と武田方武将の馬場美濃守の神格化、大正から戦前にかけて行われた古戦場の記念碑群の建立をとおり、地域全体が一つの史蹟空間として存在し、それぞれの時代の歴史観を反映しながら、特徴ある姿を示し続けたことを明らかにした。

ところで、令和七年度図書館資料展では長篠合戦四百五十年にあわせ、「長篠合戦と東三河の人々」を開催した^⑤。同展は、長篠合戦直後における戦没者慰霊を展示の出発点とし、江戸時代については東三河における長篠合戦研究のさきがけである新城の太田白雪や、その影響を受けた豊川や吉田の文化人たちによる著作を紹介した^⑥。明治以降は、前述の金子氏や羽賀氏の研究をなぞる形で長篠合戦の慰霊や顕彰活動を紹介するとともに、新城市内における長篠合戦の郷土教育を併せて紹介した。「長篠合戦そのものの話がない」という声もあったが、身近な場所に合戦に関連する地域と出来事があったことを初めて知ったという声も多々あった。

さて、本稿は資料展では十分に検討できなかった近代（明治から昭和戦前期）における鳥居強右衛門顕彰に着目する。この時期における鳥居強右衛門に着目する理由は以下の二点である。①明治以降の東三河における合戦当事者の顕彰において、奥平信昌、馬場信房、鳥居強右衛門が別格視されていたなかでも特別視されていたこと（後述する「長篠合戦顕彰会趣意書」）。②長篠合戦の当事者のほとんどが地元出身者以外であり、有海原（設楽原）の決戦は織田・徳川軍と武田軍が中心（東三河の国衆らは、主に酒井忠次とともに鳶巣砦攻略戦に従軍し、かつ主立った国衆の当主は戦で討ち死にできなかった）であったなかで、強右衛門は数少ない東三河出身者であり、のちの時代の地元の人々の間でも特に関心の度合いも高かった（地元の人々にとっては、地元出身者を慰霊したくても、著名な武将が現幸田町を根拠地とした深溝松平氏の松平伊忠くらいで、なじみが薄かったのだろう）。

このように、強右衛門は東三河出身（現豊川市、詳細は後述）であったことに加え、その自己犠牲が近代日本の軍国主義の中で美談、理想として語られた（利用された）ことで全国的に知られる「郷土の偉人」となった。本稿では、以下の四点を検討する。まず近代において強右衛門顕彰が行われる前提として、①近世の東三河でどの程度強右衛門の存在

が知られていたのかを、東三河で編まれた地誌や文化人の著作から確認する。続いて、②近代において強右衛門の存在が全国的に知られていく様子を主に金子氏の研究によりながら確認する。

続いて、①、②を踏まえ、③長篠合戦の舞台であった長篠及び東郷地区における強右衛門顕彰を検討する。最後に、④強右衛門の出生地である市田（現豊川市）における強右衛門顕彰を検討する。なお、強右衛門顕彰を主たる検討対象とするが、当然のことながら強右衛門顕彰の多くは長篠合戦顕彰と一体的に行われていたので、大きな枠組としての長篠合戦顕彰にも注意を払いながら検討を進めたい。

1 近世の東三河における強右衛門顕彰

(1) 東三河の地誌などに見られる強右衛門

金子拓氏は、強右衛門に関する記述は十七世紀に成立した『権現様一代記』（著者松平忠勝〈長篠合戦で戦死した松平伊忠の次男で一六〇九年没〉、『甫庵信長記』（一六二四年成立）、『三河物語』（一六二六以前に成立）などの史書・軍記物にはすでに登場していたとする⁷⁾。また、軍記物ではないが、正徳三年（一七一三）に成立した『倭漢三才図会』のなかに強右衛門の墓碑が掲載されている⁸⁾。

一方で、東三河について書かれた地誌に目を向けると、強右衛門についての記述がある地誌の初出は宝永四年（一七〇七）に御油（現豊川市）の林五郎太夫が著した『三河雀』で、長篠村医王寺に強右衛門の墓があると述べている（現存せず）。また、新城の著名な文化人である太田白雪が享保十一年（一七二六）に著した『続柳陰』には、強右衛門の戦死地や墓所についての記述はないが、「寒峰（雁峰山）」は強右衛門が狼煙を上げた場所としている。

地誌以外では、豊橋市図書館の母体である「羽田八幡宮文庫」を創立した羽田野敬雄が、長篠古戦場を二回訪れている。一回目は安政五年（一八五八）である。敬雄の日記『萬歳書留控』によれば、敬雄は式内

社（平安時代の『延喜式』に記載された神社）を比定していく研究のなかで、設楽郡大宮村（現新城市）の石座神社を「式内社」とする道標を「羽田文庫幹事中」で建て、完成した道標を見たついでに石座神社、茶臼山稲荷、松尾社など、長篠合戦ゆかりの地を見物した⁹⁾。

慶応元年（一八六五）にも敬雄は再び石座神社を訪れるとともに、長篠古戦場、大通寺（長篠）の「長篠古戦場跡盃井跡」、「山県（昌景）之墓」などとあわせて新昌寺にある強右衛門の墓（後述）を見物した¹⁰⁾。

(2) 強右衛門の墓

強右衛門の墓とされているのが、作手の甘泉寺と有海の新昌寺（ともに現新城市）にある。甘泉寺にあるのは、厳密に言えば強右衛門の位牌と建立年月日不明の「伝強右衛門墓」である。羽賀氏によれば、渡辺富秋の『三河国墳墓記』に有海村笹場野に強右衛門の墓があり、信長の命により甘泉寺に改葬した。また、林自見の『三河刪補松』（一七七五年成立）には、甘泉寺に改葬したのは強右衛門の六代の子孫で、奥平信昌の血筋を引く福山松平家に仕えていた鳥居強右衛門清商であると記されているという¹¹⁾。なお、実物は未見だが、乗本（現新城市）出身の郷土史家柿原明十の『長篠戦争研究資料』其十（長篠城史跡保存館蔵）によれば、天正三年六月十六日（一五七五）に有海村新昌寺の土饅頭の上に五輪塔が建てられ、慶長八年（一六〇三）十一月十六日に五輪塔と遺骨が甘泉寺に移された。これは、強右衛門の嗣子信商が作手城主となっていた松平忠明の家老となり、新昌寺では墓参りが不便であったためだと述べている¹²⁾。

この甘泉寺へ墓が移設されたことよって強右衛門の墓が無くなってしまった有海の新昌寺には、宝暦十三年（一七六三）九月十六日に有海村が願主となり強右衛門の墓が建立された。この墓石の表面には、強右衛門の俗名、没年、行年とともに「智海常通居士」と戒名が刻まれている。さらに、墓石の左右と裏面には強右衛門の事績や辞世の句も刻まれてお

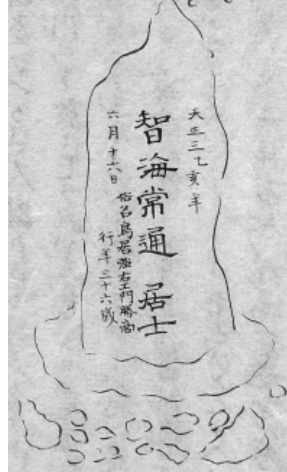
り、宝暦年間の有海村の人々が強右衛門の事績に關する知識を持っていたことがわかる。ただし、この墓石が建立された経緯はよくわかっていない。今も現存するこの墓石は、『三河国名所図絵』



鳥居強右衛門の墓(新城市有海 新昌寺)

(夏目可敬著「一八六二年成立」)にも描かれており、当時すでに旅人たちも立ち寄る場所となっていたことがわかる。

このように、強右衛門の事績は近世においては地元でもある程度知られていた。特に戦死した場所に近い有海村において、村としての慰霊が行っていたことは注目すべき事実である。



羽田野敬雄が描いた鳥居強右衛門の墓
〔安天羅日記〕豊橋市図書館蔵

(3) 長篠阿部家の合戦研究と「長篠合戦布陣図」

近世の東三河における長篠合戦研究に大きな影響を与えたものとして、筆者は長篠の医師で文化人としても知られた阿部家歴代の著作に注目している。阿部家は、乗本村の阿部本家から分家し、長篠村で古医方(漢方医学の一種)の医院鳶巢軒を営んだ医師の家系である。阿部家の歴代当主は、医師であると同時に東三河に関する研究、執筆を行っていた¹³⁾。

長篠阿部家の初代阿部玄喜(信好)〈?〜一七九五〉は文章にも通じ、

林自見の『三河刪補松』の校訂者に名を連ねるとともに、自らも『三河国吉田郷八景』を編み、また、渡辺富秋の『引馬誌』を転写し、解説を付した。

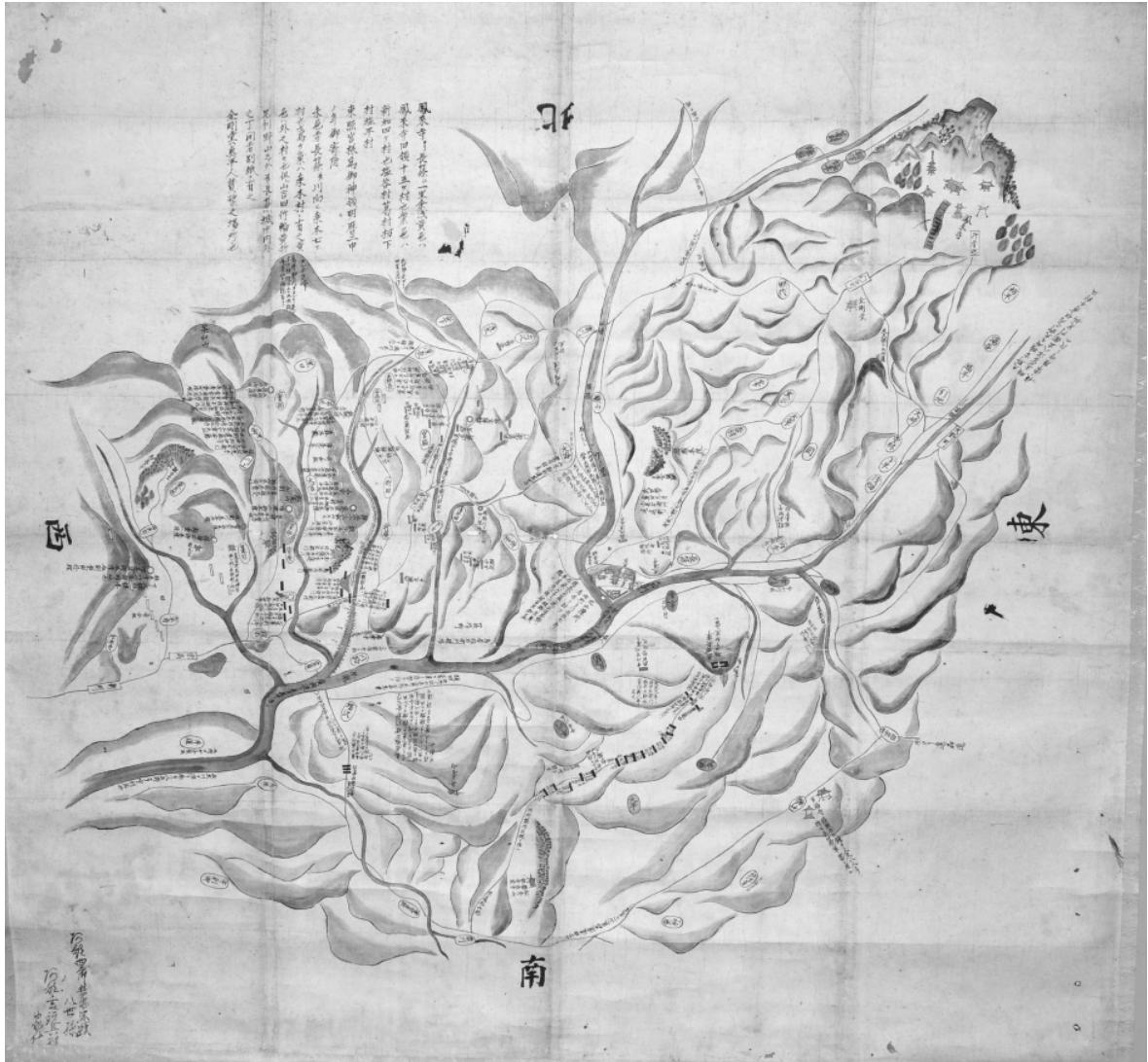
二代阿部玄説(長解)〈?〜一八一八〉は初代玄喜の息子である。父と共に医業に従事したため玄喜を名乗らず玄説を称したが、後に鳶巢軒を継いだ。また『三河国二葉松』の冒頭に解説文を書いたほか、その成立事情を記した『三河国二葉松 式巻添書』を著した。玄説の後、阿部家は三代から五代も玄喜を名乗り、医者であるとともに文化人としても活動した。

ところで、長篠や新城を中心に東三河各地に長篠合戦における織田・徳川と武田の両軍の布陣や戦鬪の流れが書き込まれた「長篠合戦布陣図」(以下、「布陣図」といふべき絵図が多数残されている。初出のものは阿部家旧蔵のもので、東三河各地に残る他の「布陣図」のいくつかをみると、阿部家旧蔵の「布陣図」を写したか、それをさらに写したと思われる書付があるものがある。

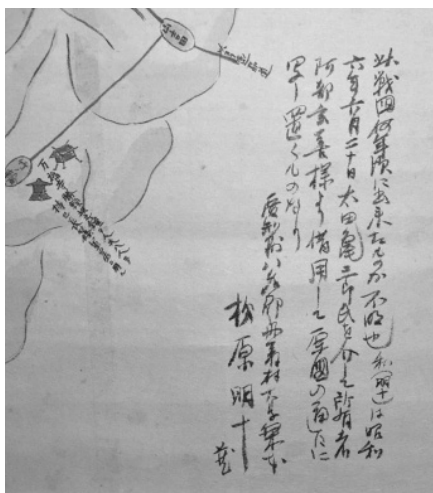
この「布陣図」には、長篠合戦とは直接関係のない江戸時代における鳳来寺領や乗本周辺の村々を色分けしたことを示す文章や凡例が書き込まれている。おそらく鳳来寺領と乗本周辺の村々の争いで作成された絵図がもともと長篠に存在し、その絵図に長篠合戦の武将の布陣場所を記したのが、この「布陣図」のもとになったと考えられる。

「布陣図」には、強右衛門関連の場所として「奥平人質磔之場所」と処刑された場所、長篠城から抜け出した場所、さらに太田白雪の『続柳陰』にも記述のあった「寒峰(雁峰)山で狼煙をあげた」といった内容が該当する場所に書き込まれている。

「布陣図」の筆写年をみると、近世後期だけでなく明治以降のものもある。なかには、柿原明十のように近代に長篠合戦研究をリードした地元郷土史家の名前も見え、この「布陣図」が画像史料として人々に長篠合戦を印象付ける効果を持っていたと考えられる。

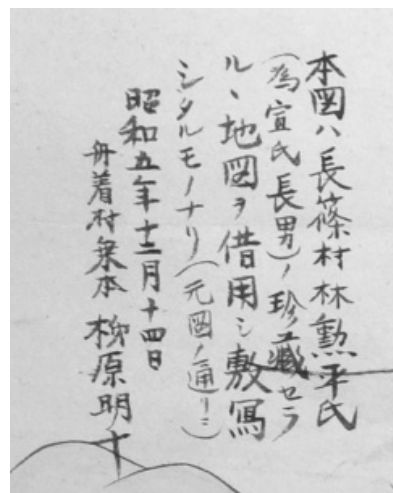


(作成年不明)「阿部家旧蔵 長篠合戦布陣図」(新城市設楽原歴史資料館蔵)



「柿原明十旧蔵 長篠合戦布陣図」の書付
(新城市設楽原歴史資料館蔵 No.1327)

柿原明十が、昭和六年(一九三二)に阿部玄喜が所蔵する絵図を借用して作成した図であることが書かれている。



「柿原明十旧蔵 長篠合戦両軍備図」の書付
(新城市設楽原歴史資料館蔵 No.1332)

柿原明十が、昭和五年(一九三〇)に長篠村の林勲平が所蔵する絵図を借用して作成した図であることが書かれている。

2 近代における強右衛門像の展開

明治以降の日本において、強右衛門像は様々な媒体を通して知られるようになった。金子拓氏の研究によりながら、その様子を見て行く¹⁴⁾。

(1) 浮世絵と歌舞伎

明治維新後、強右衛門は錦絵・浮世絵に登場した。絵師月岡芳年は明治元年（一八六八）刊行の『魁題百撰相』に、磔にされた「堀井恒右衛門」を、同年刊行『美談武者八景』の「長篠の夜雨」には、長篠城に戻る途中で武田軍が仕掛けた鳴子にかけ、見つかりそうになる強右衛門を描いている。以後、芳年は明治二〇年頃まで強右衛門が長篠城を出て家康のもとへ向かう場面、長篠城内に向かって援軍が来ることを叫んでいる場面などを描いている。

続いて、歌舞伎の世界を見てみよう。明治四年（一八七二）に市村座において上演された「碁風土紀魁升形」のなかに「鳥居常右衛門」が登場する。また、同十七年（一八八四）には新富座において上演された「後風土記劇本読」に「鳥居常右衛門」が登場する。このように、明治前半に強右衛門の事績は浮世絵（錦絵）や歌舞伎によって人々の脳裏に焼き付いていった。

(2) 書籍・教科書

近代において、強右衛門の名を全国に知らしめたのは国定教科書への採用とされているが、金子氏によると明治二〇年代にはすでに強右衛門の事蹟について触れた書籍が確認できるといふ。例えば、教育勅語が公布される直前の明治二十三年（一八九〇）四月に刊行された遠藤角昨『教育児談』をみると、同書は子ども向けの教育読み物だが、「鳥居強右衛門の忠義武勇」の題で強右衛門の話が収められている。以降、明治末年までに十五点ほどが出版されたが、その内容は修身の読物、武士の豪傑

話、軍人向けの読物などに大別されるという。修身の分野での利用は、やはり教育勅語の内容をひろめるための格好の材料として強右衛門の事蹟が注目されたと言えるだろう。

さて、強右衛門が国定教科書に採用されたのは明治三十七年に刊行された第一期の『尋常小学読本』ではなく、同四十三年（一九一〇）に刊行された第二期であった。第二期は、日露戦争勝利後の国粹主義の表れか文学的教材・国民的教材が追加されたとされている。

このように、強右衛門は明治初年から錦絵や歌舞伎などにより世間に広まっていたのに加え、明治二十年代における国家体制強化の思想的基盤となった教育勅語の考え方を涵養するための材料となり、さらに日露戦争といった対外戦争により軍人のあるべき姿として知られるようになった。それが国定教科書への採用という形で学校教育の現場に入り込むことで、強右衛門の存在はより広く知られるようになっていったという。

なお、金子氏は強右衛門が国定教科書で扱われていたのは明治四十三年（一九一〇）から大正六年（一九一七）までであり、学校で学んだのは明治三十六年（一九〇三）から四十四年（一九一〇）生まれの子供たちであったことを指摘している。なぜ、その後の国定教科書から強右衛門が外れたのかについては定かではない。一方で、後述するように近代の東三河における強右衛門顕彰は大正から昭和初期にかけて盛り上がりを見せている。教科書から外れたことと顕彰活動の関連性については、本稿では踏み込むことが出来ないが今後の検討課題の一つと考えてよいだろう。

(3) 類似事例の発掘

明治期に強右衛門の事蹟が知られるようになる、類似事例を引き合いに出すことが行われるようになる。金子氏は、明治三十七年（一九〇四）の第一期国定教科書の『尋常小学校第三学年』に登場する谷村計介とい

う人物を紹介している。

谷村は、明治十年（一八七七）の西南戦争で、西郷隆盛の率いる軍勢に包囲された熊本城から、城将谷干城の方針を伝えるために脱出を試み、二度捕らえられながらも使命を果たして戦死した軍人である。教科書に登場した明治三十七年は、西南戦争からわずか二十七年しか経っておらず、維新後にも強右衛門と同様の自己犠牲を成し遂げた人物の存在は当時の人々により共感を得やすかったのであろう。

なお、金子氏は教科書の中で強右衛門と谷村が「古今いつつの忠義なつはもの」と賞賛されていることを紹介しているが、強右衛門を主人公とした話が教科書に登場するのは前述のとおり第二期国定教科書の時なので、この教科書の記述は強右衛門の事蹟が教科書に登場するよりも前からある程度知られていたことを示していると言えよう。

もう一つ、強右衛門の類似事例として広く紹介されたのが、一八三六にアメリカで起きた「アラモ砦の戦い」である。これは、岡崎藩士の家に生まれた地理学者志賀重昂が、メキシコからの独立を企てたアメリカのテキサスの人々によるサンアントニオのアラモ砦をめぐる戦いにおいて、友軍の援護を求めて砦を脱出したボナモという人物と強右衛門の事蹟の類似性に着目したものである。志賀は、生涯繰り返しこの「アラモ砦の戦い」について各地で講演をしており、後述するように長篠合戦三百五十年祭では会場となった有海新昌寺でも講演を行っている。なお、志賀はサンアントニオと岡崎城に「アラモの戦い」の記念碑を建てた。

岡崎出身の志賀にとっては、明治以降に英雄化した強右衛門は、「三河武士のふるさと」を誇る岡崎の出身者として、岡崎の出身ではないにせよ「犬より忠実な三河武士」をアピールする好材料だったのであろう。

3 長篠・東郷地区における強右衛門顕彰

明治以降、長篠古戦場周辺には多くの墓碑や案内碑が相次いで建てられていく。こうした長篠古戦場が歴史空間として整備されていく様子に

ついては「はじめに」でもふれた羽賀氏の研究がある¹⁶。羽賀氏は、長篠古戦場付近に住む人々が、古戦場を訪れる様々な人々を案内したいという意思を持っており、案内をするために長篠合戦の史実を求め研究活動を行うとともに、訪れる人の道しるべとなる墓碑や案内碑が建てていったことを指摘している。

明治以降の長篠古戦場付近の郷土史家たちは積極的に古戦場訪問者の案内をした。明治三十三年に「三州設楽郡長篠古戦場図」を発行したことで知られる長篠村の林重三郎は、古戦場案内を求めてきた訪問者から受け取った名刺を帳簿に綴っていた。現存するものは明治十七年から同四十四年までのもので、八百十二枚が綴られており、前述した志賀や、鳥居家の子孫、軍隊関係者らの名刺もあるという¹⁶。

また、新城の皆川登一郎の著書『長篠戦記』（一九一〇）の巻末に以下のようない紙が貼られている。

稟告

長篠古戦場実地探究ノ大方諸君中或ハ東道主人ノ必要ヲ感ゼラルル
アラン此感ヲ懐カルル諸君ハ請フ編者ニ下命アレ編者ハ喜ビテ貴命
ニ応ジ実地ニ就キ詳細ニ説明シテ余蘊ナカランコトヲ期ス

愛知縣南設楽郡新城町四百六拾九番戸

明治四十三年

皆川登一郎

三月 日

謹述

皆川は、長篠古戦場探究を行いたいという人々に対し、皆川へ依頼してくれば喜んで実地説明を行うと言っている。こうした地元郷土史家による長篠古戦場の実地案内は戦後も続く。長篠城史跡保存館初代館長となった丸山彰氏も、多くの訪問者の応対をしたことで知られている¹⁷。

また、長篠合戦研究は地元の学校でも行われていた¹⁸。長篠小学校では、大正二年（一九一三）十一月、『甲陽軍鑑』、『信玄全集』、『甲斐国志』

を購入し、教員たちが戦史研究を盛んに行っていた。強右衛門の命日を「至誠式」と名付け、講話、見学、墓地清掃などを昭和二〇年の終戦まで行っていた。長篠小学校では、春と秋に児童を一年生から六年生までの二年ごとと高等科の四つに分け、東郷村、長篠村に散在する合戦関連史跡の見学を行っており、ゆかりの地の寺の住職や郷土史家が児童の対応をした。

このような明治以降長篠古戦場付近における墓碑や案内碑の建立、慰霊や顕彰活動はどのように行われていったのか。その流れを追いながら、強右衛門がどのように扱われてきたのかを見ていきたい。

(1) 英雄視される馬場信房

馬場信房（信春）は、長篠合戦においては武田家重臣として参戦し、武田勝頼をいさめたが聞き入れられず、自らは討ち死にした忠義の士として知られている。近世において、『信長記』や『甲陽軍鑑』で信房の戦功は繰り返し語られてきた。『甲陽軍鑑』の記述に基づいた軍記物が多く出され、また「武田二十四将図」などが盛んにつくられるなかで、「馬場美濃守」の人氣が高まっていた。

明治以降にはさらに人氣が高まり、主君が敗走するときにしんがりを務めて戦死した忠義の士として知られるようになった。明治二十四年（一八九一）、新潟県在住の馬場家の子孫を名乗る人物の出資によって長篠字西野々に馬場信房の墓が建立された。同二十六年には出沢村字前畑に同村の人々を中心となって馬場美濃守戦死墓が建立され、翌二十七年には句碑も建立された。さらに翌二十八年には出沢村の若者組が馬場美濃守の墓前で施餓鬼を行った¹⁹⁾。

前述した丸山氏は、長篠合戦ゆかりの人物とその子孫をテーマとした著作を複数残しているが、同じく武田重臣である山県昌景、内藤昌豊の子孫を名乗る人と比べて、馬場の子孫を名乗る人が全国に多くいたようである²⁰⁾。丸山氏は、そのような武田重臣の子孫を名乗る人々をゆかり

の地に案内した。

このように、明治二十年代の長篠古戦場周辺では、強右衛門よりも馬場信房の顕彰の方が盛んに行われていたのである。

(2) 有海新昌寺及び東郷村が主体となった顕彰活動

明治三十六年（一九〇三）四月、強右衛門の墓がある東郷村有海の新昌寺本堂西側に鳥居閣が建てられた²¹⁾。発起人となったのは同時住職の横山良仙であった。新昌寺といえば、宝暦年間に建てられた強右衛門の墓がある寺である。新昌寺は、戦前の長篠古戦場周辺地域における強右衛門顕彰の拠点となっていく。新昌寺では、大正六年（一九一七）に強右衛門の墓域拡大のための寄付を募った。有海では鳥居講と称する頼母子講行って寄付金を集めた。この寄付金を基にして、新たな強右衛門墓域一帯が同九年に完成した。

大正二年（一九一三）四月には東郷村有海字篠原（現在の場所へは昭和四十四年（一九六九）に移されており、当初はもう少し新昌寺寄りであった）に鳥居強右衛門磔死之跡碑が建設された。当時の東郷村長山内五寿雄の記録によれば、この地にはそれ以前に陸軍医総監松井順が建てた強右衛門磔死の地の木標があったが、それが朽ちたので東郷村が豊川鉄道株式会社と謀り、奥平昌恭（長篠城主奥平信昌の子孫）の寄付と豊川鉄道有志の寄付金を得て建てたという。この記念碑は奥平昌恭が撰文、『日本戦史』の著者として知られる横井忠直（戦史家）が筆をとり、また題字は徳川宗家十六代の徳川家達（当時貴族院議長）であった。なお、同年には長篠古戦場顕彰会によって古戦場内に多数の案内石碑が立てられており、長篠古戦場が史蹟空間として整備された。

また同年九月には、豊川鉄道長篠駅（現在の飯田線大海駅）前に鳥居権現の碑が建設された。これは、新昌寺住職横山良仙の発願、豊橋市下地町の夏目直一の寄進によるものである。

大正四年（一九一五）八月には、東郷村八束穂信玄花菱座において長

篠古戦場顕彰会第一回総会が行われた。同会は、長篠合戦において忠勇義烈を尽くした諸士の遺風を顕彰し、あわせて古戦場遺跡を保存するこ



(裏面)



「鳥居強右衛門礫死之跡碑」(表)
(新城市有海)

とを活動目的として発足した。同会の趣旨書では、特に顕彰する人物として武田方は馬場信房、山県昌景、内藤昌豊、徳川方は奥平信昌と鳥居強右衛門の名を挙げている。

同会会長には南設楽郡長の河野省一郎を、副会長は医師であると同時に郷土史家でもあった牧野文齋が選出された。記念講演は前述の志賀重昂が、やはりアラモ砦の戦いと強右衛門について語った。

なお、同会は翌大正五年(一九一六)八月に『長篠古戦場案内図』を作成した。両軍の陣容や戦死者の墳墓、新城停車場からそれらの場所へ至るまでの道順を示したもので、羽賀氏は古戦場への社会的関心の高まりを背景に、訪問者が史蹟を巡覧する際の目印として前述の標柱などが建てられ、さらにこの案内図の出版によって長篠古戦場は空間的な拡がりを持つ場として形成されたと評価している²²⁾。

(3) 鳥居強右衛門勝商長篠戦役陣歿将士三百五十年祭
大正十四年(一九二五)十二月十六日、十七日の二日間、長篠戦役人歿将士三百五十年奉斎会主催で三百五十年祭が有海新昌寺鳥居閣前を会場に開催された。「長篠戦役」の前に強右衛門の名前が冠されたことは、長篠合戦における強右衛門の存在が特別視されていたことの表れであろう。南設楽郡長長谷川義男を会長、長篠古戦場に位置する東郷村長夏目潮五郎と長篠村長時野武司が副会長となった。これまでの長篠古戦場顕彰が民間団体を中心に行われていたのに対して、三百五十年祭は郡と長篠合戦の舞台となった二つの村が主導した点で特筆すべき祭典であった。

祭典は十六日の午前に長篠村・東郷村の在郷軍人・青年団員と郡内出身の現役兵が参加した記念模擬戦に始まり、新昌寺に場所を移しての法要が行われた。午後は長篠村青年団による角力、地元の小学生が参加した野試合、相撲が行われた。翌十七日は前述の志賀重昂による「アラモの戦い」に関する講演と、豊橋在住の陸軍少将五味為吉による「長篠合戦の遺訓」の講演が行われた。

祭典の期間中、長篠城址の弾正廓を会場とした遺物展覧会が行われた。主な出品者は奥平昌恭、林勲平（長篠村）、阿部玄喜（長篠村）、医王寺、新昌寺、牧野図書館（牧野文齋）であった。また、祭典開催を記念して郷土史家川合森之助編『長篠戦略記』と記念絵葉書が来賓に配られた。

なお、羽賀氏は翌年に刊行された『南設楽郡誌』の序文で、郡長長谷川義男が「鳥居強右衛門勝商が千古不朽の誠忠に鬼神を泣かしたる壮挙は、普く世人の熟知する所にして、特に郡民諸氏の感慨や一層深刻なるものあるを信ず」と記していることに注目し、郡誌という公式の史書に書き込まれることで、強右衛門が地元英雄として祭り上げられていったと指摘している⁽²³⁾。

また、このような史蹟空間が生み出された要因について、羽賀氏は明治四十四年に愛知県内で行われた史跡名勝の調査、大正二年秋に実施された陸軍特別大演習の際に、大正天皇の観覧に供すべき名所・旧蹟・古戦場調査の二つを県内各郡に行わせた。南設楽郡では、旧蹟として野田城址と長篠城址、古戦場として長篠、古墳として強右衛門、馬場信房、山県昌景、内藤昌豊の墓及び信玄塚があり、長篠古戦場付近の保存活動については長篠古戦場顕彰会が行っていると郡が報告していたことを指摘している⁽²⁴⁾。

このように、長篠・東郷地区では長篠合戦及び強右衛門の顕彰が明治二〇年代から盛んに行われてきた。羽賀氏がすでに指摘したように、この一連の顕彰活動を通じて古戦場は史蹟として整備されてきたが、その背景には郷土の歴史を訪れる人々に正しく伝えたいという地元の人々、特に郷土史家の強い思いがあったことを指摘しておきたい。

4 市田における強右衛門顕彰

長篠古戦場付近で様々な顕彰活動が行われていた大正期、強右衛門の出生地とされる八幡村市田（現豊川市）でも活発な動きが見られた。そもそも、強右衛門が市田出身であるということは、金子氏によれば宝永

七年（一七一〇）の序がある『三州長篠戦記（四戦紀聞）』（幕臣根岸直利編）が初出であるという。

さて、先に見た長篠古戦場付近の明治以降の顕彰活動の動向については史料に乏しく、刊行物の記述に依拠するしかなかったが、市田における強右衛門顕彰については明治末年から始まった強右衛門顕彰を行った「鳥居会」が作成、収受した文書「鳥居会文書」（松永寺蔵）が残されている。この史料群を一部使用した金子氏によれば、鳥居会の幹事的立場であった寺部與吉、早川卓治のもとにあった書簡や新聞切り抜き、覚え書きなどをまとめたものであるという。

現存する「鳥居会文書」は鳥居会が収受した書簡や葉書だけでなく、会の発信文書についてはその下書きや控え、関連する新聞記事の切り抜きや会で発行した絵葉書、当時出版された長篠合戦や強右衛門に関する書籍も綴り込まれており、綴六点到約七〇件の文書等が綴り込まれている。筆者が閲覧したのは新城市設楽原歴史資料館蔵の複写版である。以後、鳥居会文書を引用する際に使用する史料番号は、同館による整理番号である。

（一）赤塚山への記念碑「烈士鳥居勝商碑」建設

現在も豊川市の赤塚山に残る強右衛門の「烈士鳥居勝商碑」（以下、記念碑とする）建設の経緯について、鳥居会の幹事であった早川卓治は、晩年の昭和四十八年（一九七三）に以下のように振り返っている⁽²⁵⁾。

烈士鳥居勝商碑建碑ノ思ヒ出

明治四十二年四月三日、前市田学校長神谷福之助先生「二十五年勤続」ヲ招キ謝恩会ヲ開会ノ議起リ、時ノ凱旋軍人二十数名主体トナリ寺部与吉・寺部保蔵・寺部英次・和歌山寛太郎・山田伊吉・菅沼喜三郎・早川金作・植島新平・白井喜蔵・其他二十数名、在郷軍人会長早川覚治謝恩会財源トシテ桜ノ馬場「本宮山大鳥居カラ大崎二

至る」両側ノ桜ヲ押ヘテ居ル松ノ木ヲ伐ラシテ貫フコトヲ妙巖寺ニ承認ヲ求メ、伐採シテ売却、四月三日恩師ヲ馬場ニ招待シテ桜花ノ下ニ盛大ナル謝恩会ヲ開催ス、其席上今回日露戦争ニ於テ市田ニテハ一人の戦死者モ出ナカッタコトハ、其昔鳥居強右衛門様ノ加護ノ賜物ト思フ故ニ、他町村デハ忠魂碑ノ建設ガアルガ、市田トシテハ鳥居強右衛門公ノ碑ヲ建テ、テハ如何ト発言アリ、一同賛成、区会ニ計リ位地ヲ赤塚山ト決定、碑建設ノ敷地ハ在郷軍人ニ地ナラシマ、其下ニ小学校ノ運動場三反歩を地ナラシマスル、之レハ野口市田学区民惣出ニテ十一日間ノ奉仕竣工、鳥居烈士建碑基壇ノ木標ヲ建テ宝飯郡長村上金一郎、八幡村長鈴木岩吉氏ノ臨席ヲ乞ヒ地鎮祭ヲ行フ、郡長曰クカ、ル偉人ノ市田ヨリ出シタルハ市田ノ名譽ハ勿論ダガ、又宝飯郡ノ名譽誇リトスル所ナリ、此建碑ハ市田丈ケ等ト言フ軽々シクスベキデハナイ、宝飯郡ノ事業トシテ立派ニ建設スベキデアルトノ発言アリ一同敬服ス、即チ郡長村上金一郎、県会ギ員白井九一郎・同武田賢次、村長鈴木岩吉、歩兵第十八聯隊長権藤伝次、鉦田俊聯隊区司令官、宝飯郡在郷軍人会長大橋崧次郎發起人トナリ、各町村長ヲ賛助員、各学校長同様賛助員トナル郡会ヲ開催シテ寄付金ノ分担ヲ決定、趣意書ヲ発行シテ郡内有志ノ寄付金ヲ募集ス、此時鳥居家ノ正統ノ所在発見出来ズ苦慮スル折柄、武州忍藩士田村敬政氏ノ（卓治演習時宿舎）厚意ニ因リ、十六世鳥居德厚氏東京堀ノ内ニ居住セラルヲ知り、寺部与吉・早川卓治鳥居家訪問、市田ノ意表ヲ伝ヘ老父強右衛門清商氏ニモ面接、系図書キ等拝見、德厚氏ノ斡旋ニテ墓碑烈士鳥居勝商碑ノ揮毫ヲ旧藩主伯爵奥平昌恭閣下ニ、時世歌碑ヲ子爵松平忠敬閣下ニ碑陰撰文時ノ陸軍編修横井忠直閣下ニ御願スルコトト得タルハ光榮トスル所ナリ、石工岡崎酒井孫兵ヱ、台石岡崎近藤藤右衛門氏寄進

大正三年十月十八日除幕式、直系十六世鳥居德厚氏除幕

来賓 加藤騎兵旅団長、十八聯隊豊橋聯隊区司令官、宝飯郡在郷軍

人会長、各町村長、各学校長、郡内有志

之トハ前後シテ岡崎市地理学者志賀重昂氏アメリカテキサス州アラモノ戦ノ勇士ノ事蹟ヲ賞賛シ、自ラ碑ヲ彼地ニ建設、此石日本鳥居強右衛門救出シテ獲ル所、其石摺酒井氏ヨリ贈ラレ現存ス

爾来宝飯郡長総裁ノ下ニ祭典執行、郡制廃止后ハ宝飯郡町村会長総裁ニ豊川市長総裁ト執行セラレタルモ、終戦后一時市田鳥居会ニテ執行、昭和二十七年復活、市長総裁ノ下ニ三百七十五年祭執行 鳥居勝商ノ冊子発行（鈴木範一先生著）

（以下、昭和三十年代以降の流れについては省略）

昭和四十八年四月十四日

この早川の回顧によれば、明治四十二年（一九〇九）に前市田学校校長神谷福之助の二十五年勤続を祝う謝恩会の席上で、「日露戦争後、各地で戦死者を祀る忠魂碑が建てられたが、市田村からは一人の戦死者も出さなかった。これは、鳥居強右衛門の加護によるものと皆が考え、記念碑を建てては」という話になったという。

記念碑建設を区会に諮り建設地を赤塚山と決め、在郷軍人による地ならしを行い、地鎮祭を行った。臨席した八幡村長鈴木岩吉は、強右衛門のような偉人が市田から出たことは、市田だけでなく宝飯郡の名譽誇りとするところで、郡の事業として立派な碑を建てるべきと発言した。そして、郡長、県議会議員、豊橋の歩兵第十八聯隊長、聯隊区司令官、在郷軍人会長らを發起人、各町村長と各学校長を賛助員とした郡会を開催して趣意書を発行、寄付金の分担を決定し、寄付金募集を開始した。

早川らは、強右衛門の子孫を探し当てるとともに、奥平信昌の子孫奥平昌恭に題字の揮毫を依頼した。また、強右衛門の碑と共に歌碑も建てることとなり、こちらは強右衛門の子孫が仕えた旧忍藩主の子爵松平忠敬、有海の記念碑にも関わった戦史家の横井忠直が撰文した。

「鳥居会文書」には、当時の様子を伝えた明治四十二年二月二十四日の地元紙「三遠日報」の切り抜きが貼り付けられている⁽²⁶⁾。そこには「(前略) 其名芳しき鳥居強右衛門勝商最後地は、今の南設楽郡東郷村大字有海に在る事は、普く世人の識るところなれども、其の呱呱の声を挙げし地の何れなるかを知る者甚だ少きを慨し、今回其出生地たる宝飯郡八幡村大字市田なる在郷軍人と鳥居一等の者等発起となり、広く寄付金を募集して一大碑を建設し、永く英名を不朽に伝へんと欲し(後略)」とあり、強右衛門最後の地が東郷村有海であることは世に知られているが、出生地が八幡村市田であることは知られていないため、記念碑を立てようとしたことがわかる。なお、記念碑にある「烈士」とは「鳥居会文書」によれば、当時の財賀寺住職の発案だったという。

さて、先に見たように、有海では明治三十六年に新昌寺鳥居閣建設が行われた。市田における強右衛門の記念碑が完成したのは大正三年であり、有海の記念碑の方が二年余り先行しているが、建設計画自体は完成の五年以上前から動き始めていたのである。

「鳥居会文書」には、寄付金斡旋を助めてくれた軍関係者に対する礼状の控えが複数綴られている⁽²⁷⁾。強右衛門の知名度が高くなっていたことが、寺田・早川をはじめとした発起人・幹事たちが記念碑建設のための寄付金を集めに役立ったのだろう。

記念碑の除幕式は、大正三年十月十九日に約一四〇〇名を集めて盛大に行われた⁽²⁸⁾。当日は、宝飯郡長、鳥居家十六代鳥居徳厚、豊橋市長大口喜六、八幡村長らに加え、騎兵第四旅団長ら軍関係者も多数列席した。なお、市田の強右衛門記念碑建設には、先に見た新昌寺住職の横山良仙、郷土史家の皆川登一郎(新城)、林勲平(長篠)、牧野文斎(東郷)といった長篠古戦場周辺地域の面々も名を連ねていた。強右衛門の生誕地市田の人々が中心となりながらも、長篠古戦場周辺の人々の協力を得る形



「烈士鳥居勝商碑」(表)
(豊川市市田)



「烈士鳥居勝商碑」(裏)

で建設が行われたのである。

なお、記念碑の除幕に先立ち、大正三年四月に鳥居会は強右衛門の木像を松永寺境内に作った⁽²⁹⁾。木像は、当時紀州藩南紀文庫に所蔵されて



「鳥居強右衛門辞世歌碑」(表)
(豊川市市田)

いた強右衛門の磔の図像を、強右衛門子孫の鳥居徳厚が模写したものを鳥居会が譲り受けしたものをもとにして作られたものであった。また、同六年一月十七日には松永寺の裏手に「烈士鳥居勝商生誕地」の碑も作られ、赤塚山の記念碑・歌碑とともに多くの訪問者が訪れた。

(3) 記念品の献上、寄贈、寄贈依頼

鳥居会は、記念碑の除幕式の後、方々へ記念品献上、あるいは寄贈をしている。最も多いのは記念絵葉書で、「鳥居会文書」にも同会が発行したさまざまな絵葉書が綴じ込まれている。また、鳥居会では記念碑と歌碑の石摺(拓本)の献上と寄贈も行っている。献上先としては竹田宮恒久、北白川宮成久、福島大将といったような皇族と軍関係者に、寄贈先には蒲郡町立大正文庫(蒲郡南部小学校の旧蔵書で、現在は蒲郡市立

図書館の文庫のひとつ)、愛知県第二師範学校、豊橋市立図書館(現豊橋市図書館)、名古屋第一師範学校が記されている。なお、豊橋市立図書館に寄贈されたものは、表装の痛み激しいが現存している。

一方、強右衛門の記念碑の存在が世に知られるようになると、主に軍関係者からの石摺寄贈依頼が相次ぐようになる。鳥居会は、これまでに各所へ献上、寄贈した石摺は建碑前に作成したもので、除幕式の後には記念碑を神聖なものとして扱うため新たな石摺は行っていないとして寄贈をすべて断った。

(4) 市田を訪れる軍関係者

強右衛門の記念碑完成から一八年後の昭和七年から同十二年にかけて、豊橋の歩兵第十八聯隊や陸軍大学の演習がたびたび市田の地で行われ、赤塚山の強右衛門の記念碑や、磔にされた強右衛門の旗印をもとにして松永寺内に作られた強右衛門像を見学に訪れている。「鳥居会文書」には軍関係者からの演習案内や、訪問の相談、訪問後の礼状が多く綴られている。それらを見ていくと、訪れるのは赤塚山の記念碑よりも松永寺の強右衛門像の方が多い⁽³⁰⁾。また、早川や寺部は求めに応じて強右衛門に関する講話を行っていた。

鳥居会が、強右衛門最期の姿を誰もが想像できる強右衛門像を作ったこと、さらに市田が軍都となった豊橋の最寄りであったことも、軍関係者による強右衛門顕彰の活発化につながったと言えるだろう。

おわりに

鳥居強右衛門は、近世初期から軍記物に登場しており、東三河においても文化人たちが地誌や著作物で強右衛門の事績を紹介していた。長篠古戦場周辺の人々は、それらから得たと思われる情報を基に墓碑を立てるなどして強右衛門を顕彰していた。

明治初年には浮世絵によって視覚的に強右衛門の事績が紹介され、そ

の後は日本の対外進出とともに強右衛門の自己犠牲の事績が強調されていった。

明治中期以降は、強右衛門最期の地である長篠・東郷地区において、特に有海の新昌寺が中心となって鉄道会社も関与しながら顕彰が行われ、学校教育の中にも取り入れられていった。こうした動きは、大正に入ると愛知県が進めた史蹟調査、保存事業と足並みをそろえた形で行われ、羽賀氏が指摘されたように、長篠古戦場は合戦の様子を知ることができる史蹟空間として整備されていった。

一方、強右衛門生誕の地とされる市田では、最期の地である長篠古戦場付近に比べて生誕の地が人々に知られていなかったこと、日露戦争で戦死者を出さなかったことが契機となり、強右衛門の記念碑建設をはじめとした顕彰活動が始まった。市田での顕彰活動は、地元の有志が行政や在郷軍人会を巻き込み、強右衛門の子孫の協力も得ながら地元宝飯郡だけでなく長篠古戦場のある長篠村や東郷村、さらには豊橋の歩兵第十八聯隊も巻き込んだ大規模な活動に発展していった。

このように、江戸時代からその存在が知られていた強右衛門の近代における顕彰は、強右衛門の最後の教訓性を利用したい軍部の思惑はありつつも、郷土の偉人を誇りたい長篠古戦場付近の人々と強右衛門の出身地市田の人々によって活発に行われるようになっていったのである。

(豊橋市図書館 主任学芸員)

【謝辞】本稿作成にあたり、新城市設楽原歴史資料館の湯浅大司館長、同館及び長篠城址史跡保存館職員の皆様には史料調査、撮影の便宜を圖っていただきました。また、新城市有海の織田昌彦氏には、有海地区における長篠合戦及び強右衛門顕彰についてご教示いただきました。ここに記して御礼申し上げます。

【表】 明治から昭和戦前期にかけての東三河における長篠古戦場・鳥居強右衛門顕彰（筆者作成）

年月日	出来事
明治17年（1884）	長篠村の林重三郎、長篠古戦場来訪者の名簿帳を綴る
明治24年（1891）11月22日	長篠村大字長篠字西野々に馬場信房殿戦忠之碑建立
明治26年（1893）6月	出沢村字前畑に馬場美濃守戦死墓建立
明治27年（1894）	馬場美濃守墓に句碑建立
明治28年（1895）	出沢村では馬場美濃守戦死墓前の前で施餓鬼法要
明治33年（1900）	林重三郎『三州設楽郡長篠古戦場図』刊行
明治34年（1901）	『南設楽郡誌』編纂に係る長篠古戦場調査
明治35年（1902）	茶臼山神社境内に織田信長歌碑建立
明治36年（1906）	有海新昌寺に鳥居閣建設
明治42年（1912）2月	市田赤塚山に鳥居勝商顕彰碑建立のための地鎮祭執行
大正2年（1913）4月16日	有海字篠原に鳥居強右衛門磔死之趾碑建立
大正2年（1913）11月18日	長篠小学校が『甲陽軍鑑』、『信玄全集』、『甲斐国志』購入
大正3年（1914）1月	長篠古戦場に戦蹟案内の石標建立 / 古戦場案内図発行
大正3年（1914）4月17日	市田の松永寺に強右衛門の木像が作られ開眼供養執行
大正3年（1914）5月	長篠古戦場に武田諸将の墓碑建立
大正3年（1914）9月	長篠駅（現大海駅）前に鳥居権現の碑建立
大正3年（1914）5月14日	市田赤塚山に鳥居勝商歌碑建立
大正3年（1914）10月18日	市田赤塚山に鳥居勝商顕彰碑建立、除幕式
大正3年（1914）11月10日	詩歌句集『なかしの』出版
大正4年（1915）8月11日	長篠古戦場顕彰会第1回総会を東郷村大字八束穂の信玄花菱座で開会
大正6年（1917）1月17日	市田松永寺の裏手に鳥居勝商誕生地碑建立
大正6年（1917）3月	強右衛門墳墓修理のための募金
大正6年（1917）6月	八束穂字八子に土屋昌次戦死之地の碑建立
大正7年（1918）3月17日	久邇宮一家、天王山と長篠城址に植樹
大正7年（1918）8月	長篠城本丸に城址の碑建立
大正9年（1920）6月	鳥居強右衛門の墓域拡大と新設
大正11年（1922）1月25日	名古屋新聞に鉄道敷設に伴う長篠城址への反対意見書が掲載
大正14年（1925）12月16日	新昌寺鳥居閣前において三百五十年祭開催
大正15年（1926）6月25日	『南設楽郡誌』刊行
昭和4年（1929）12月17日	長篠城址が史蹟指定される
昭和5年（1930）12月26日	信玄祖師堂（日蓮宗東三教会所）に長篠役陣歿者忠魂堂設置。東三河教育界会員により位牌設置
昭和6年（1931）8月	信玄塚に火おんどりに女子供による盆踊り開始
昭和7年（1932）12月～	歩兵第十八聯隊や陸軍大学校が市田で演習を実施
昭和10年（1935）7月9日	山梨県人の長篠古戦場見学団来村
昭和10年（1935）8月	柿原明十が長篠古戦場の戦蹟を巡り『地歴の甲斐』に発表
昭和10年（1935）11月	山崎良平の墓碑調査『東郷村における長篠合戦関係墓碑』
昭和13年（1938）5月21日	竹広村信玄原に宝篋印塔建立、山梨県人による慰霊法要

- (1) 金子拓『長篠合戦の史料学』（勉誠出版、二〇一八）、同『長篠合戦 鉄砲戦の虚像と実像』（中央公論新社、二〇二三）。
- (2) 羽賀祥二『史蹟論 十九世紀日本の地域社会と歴史意識』（名古屋大学出版会、一九九八）。
- (3) 金子拓『鳥居強右衛門 語り継がれる武士の魂』（平凡社、二〇一八）。以下、金子氏『強右衛門』と表記する。
- (4) 前掲、羽賀氏著書。
- (5) 令和七年度図書館資料展「長篠合戦と東三河の人々」
- (6) 菅野洋介「長篠合戦伝承の由緒と「知」の継承―太田白雪と羽田野敬雄の著作を例に―」（中野達哉監修・駒澤大学近世史研究会編『近世三河と地域社会』岩田書院、二〇二三）。
- (7) 前掲、金子氏『強右衛門』八二―一〇一頁。
- (8) 『鳳来町誌 長篠の戦い編』（鳳来町、一九九七）四四七頁、新城市郷土研究会編『長篠戦後四百年史』（新城市教育委員会編、一九七五）三七頁。
- (9) 前掲菅野氏論文。
- (10) 羽田野敬雄『安天羅日記』（「橋良文庫」豊橋市図書館蔵）。
- (11) 前掲、羽賀氏著書三八五頁。
- (12) 前掲『鳳来町誌』四五―一頁。
- (13) 以下、長篠阿部家については、『近世近代東三河文化人名辞典』（未刊国文資料刊行会、二〇一五）に拠った。
- (14) 以下、本章の断りのない引用は同書より。
- (15) 前掲、羽賀氏著書。
- (16) 前掲『鳳来町誌』四五八―四五九頁。
- (17) 『初代丸山館長の郷土再発見』（新城市長篠城址史跡保存館、二〇一八）。
- (18) 前掲『鳳来町誌』四六一―四六二頁。
- (19) 前掲『長篠戦役四百年』九一頁。
- (20) 丸山彰『甲州の名将 馬場美濃守信房公とその子孫』（鳳来町立長篠城址史跡保存館、一九七二）、同『甲州の剛将内藤昌豊公とその子孫』（鳳来町立長篠城址史跡保存館、一九八七）、『烈士鳥居強右衛門とその子孫』（鳳来町立長篠城址史跡保存館、一九九三）。
- (21) 以下、『長篠戦役四百年』一〇〇―一〇二頁。
- (22) 前掲、羽賀氏著書三八八―三九三頁。
- (23) 前掲、羽賀氏著書三九五―三九六頁。
- (24) 前掲、羽賀氏著書三九六―三九七頁。
- (25) 「鳥居会文書」五―七。
- (26) 「鳥居会文書」一一三「明治四十二年二月二十四日付 三遠日報切り抜き」。
- (27) 「鳥居会文書」一一八「大正二年十二月二十三日付 豊橋聯隊区指令豊橋聯隊区司令部銚田俊宛て早川金作・寺部与吉書簡」ほか。
- (28) 「鳥居会文書」一一三三「大正三年十月十九日付 新朝報切り抜き」、同番外「祭典記録」。
- (29) 前掲、金子氏『強右衛門』二六七―二七二頁。
- (30) 「鳥居会文書 往復書類綴 壺」。